
Making Magic Seed

kamome23

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a k i n g M a g i c S e e d

【Nコード】

N 2 0 1 5 X

【作者名】

k a m o m e 2 3

【あらすじ】

時は中世。舞台は王立ウルスラ魔法学校。人々は魔法をつかえた。魔法の源を「アルケー」と言った。アルケーは“火”“風”“水”“土”それらを合わせることによって魔法が使えた。そんな、時、舞台で始まる。入学して来た。一人の男のおはなし・・・

第0話 はじまりの日

時は中世

まだ貴族や王様が、国を統治していたそんな時代

舞台は王立ウルスラ魔法学校

学校の周りには、一つの都市が出来ていたそんな場所

人々は魔法をつかえた。

魔法の源を「アルケー」と言った。

アルケーは“火”“風”“水”“土”

それらを合わせることで魔法が伝えた。

各個人比率は火：？・水：？・風：？・土：？このように表されていた。

数値は5が最大、1が最低。5の人は、世界において数少ない。

そんな、時、舞台が始まる。入学して来た。

一人の男のおはなし・・・

〈魔法学校・講堂〉

「あなたの数値は、オールゼロです」

1人の男が、宣告された。

髪がぼっさばさで、2枚目というよりかは、3枚目の男だった。

周りには、大勢の学生がいた。

『ざわざわ』

「ゼロだつてよ」

「なんであんな奴がこんなところにいるんだよ」

「魔法使えないのにねー」

散々なことを言われた。

急に連れてこられて、いきなりはからされた。

そして何より

「俺自身…何にもわかってないんだからー！！！」

少し戻って・・・

く俺の村く

王都から、かなり離れていて辺境の所に村がある。

海があつて、山がある。そもそもって商人の通り道である小さな宿場町だ。

「おい、カイト。王立魔法学校から書状が届いているぞ
いかにも、海の男っていうおっさんが来た。

まあ、隣の隣のただの調子のいいオヤジなんだが

「なんで…俺の所に!？」

王立魔法学校と言えば、建国当時からある名高い学校だ。

そんなところから、俺に何の用があるのか？

『ビリイ』

思いっきり破つてみた。

中には、いい品質の紙が入っていて、王家の刻印が押されていた。

「入学許可書！？ 何で入学できるんだ。」

偽物じゃないだろうな

「おまえ、あの王立魔法学校から推薦状が届いたのか？」

隣の隣のさらに隣のおじさんが、騒ぎ出した。

この村は、小さいからそんな風になっていると

「おーえゝらいつこた！！」

ほら、こんな感じに、みんなに話が飛び回る。

そんなわけで、推薦状が来ただけで、村総出でお祭り騒ぎになるそんな村だ。

「喜べーーーーー！！」

「かんぱーーーーいー！！」

「いやーめでたいね。うんめでたい」

村唯一の酒場の中には、入りきれないために、外にテーブルなどを集めて騒いでいる。

酒場の中は、修羅場だった。

裸踊りし始める人もいれば、泣きだす人もいた。

「あの！、王立魔法学校から推薦されるんだ。すごいことだぞ！！」

急に、話しかけてきたのは、まだバリバリ現役の獵師だった。

「推薦ってことは、授業料などは、無料だぞ！！ガッハハ！」

確かに、授業料なんかが、かからないのは嬉しいことだ。

「あゝそうだな」

いい加減な返事しかできない

それに未だ信じられなかった。いや、信じてない。

「めでたいことだ、俺たちの息子の門出を祝おう」

「もう一回乾杯」

隣のおやじさんが音頭をとると

『かんぱい』

もう、何回したか忘れてしまった。両手に数えられるぐらいまでは、覚えているが・・・

村長が話しかけてくれた。何歳か忘れたが、もうすぐ死ぬんじゃないかな

「王都までの、運賃ぐらいは、出してやるからの」

王都まで運賃を出してくれるだけで、大変助かる

それに、いままで必死にためたお金がある。

「俺自身したいことないし……」

その時の流れに乗って、まあいつかと思って。

緑色のリュックには、必要最低限の荷物と全財産をもって

くたびれていて、はげている青色の魔道士の服を着て。

魔道士の服は、

「昔商人がたたき売りしているのを思わず買っちゃまって、それから使ってないんだ。いやよく似合っているな」

そう言って、もらったんだ。

いつて見ることにした。王立魔法学校に……

徒歩と馬車に揺られること・・・

く3週間く

く王都・正門く

周りが城壁に囲まれていて、やけに豪華な門があった。

「やっと着いた。ここでもいいよな」

門は、数人の衛兵がいた。

「さすがだな、王都」

道がわからなかったため、とりあえず王都に來ただけなので道を尋ねてみた。

「あのすいません。王立魔法学校ってどこにありますか」

いかにも古巣で昇格していなさそうな衛兵に聞いてみた。

「王立魔法学校は、ここから南の山を越えていかないといけんぞ」

衝撃的事実発覚！！

「え……山を越える」

はあ！？あの山を越える…だと！

気が沈んでいくよ…

王都についてみると、その先に大きな山があった。

そう険しい山が…

〈山中〉

今の所、木しか見ていない。

「ここ、どこだよーーーー」

「…ここ…どこだよー」

俺の声が、反響した。

「ここは、山の中だよな。うん、山の中だ。」

暗いし、動物の鳴き声はするから怖いったらありやしない

〈1週間後〉

「山を抜けたーーーー！！！！！！」

怖かったんだから

でも、食料が現地調達できたのは嬉しい！

「赤色のキノコは、食べない方がいい」

そこには、広い平原があった。
そして、その先に城壁があった。
「あれだな、まってるー学校!!」

なんか目的が違ってきてるような・・・

（3日後）

王都と比べると小さいが立派な城門があった。

「なめてたぜ、学校を」

建物を見えていたのだが、行くのに時間がかかった。

「学校へ、いくぞー!!」

「王立魔法学校は、ここだな」

門が閉まっていたため叩いてみることにした。

『ガンガン ガンガン』

「なんだ、お前はあやしい姿をして」

十分にお前のほうがあやしいと思うぞ俺は

自分の姿を見ると山の中を越えてたせいか、服が汚くなっていた。
だから、道であった子どもが俺を見た瞬間泣いていたのか。
ちよつと傷ついていてたんだから

「ちよつとこつちにこい」

二人の衛兵につかまった。

えっ何この状況!?

「俺は、ここの学生で、推薦状がここに」

「馬鹿なこと言な、入学は2か月まえだぞ」

「えっ…二か月前って。届いたのが、一か月前だぞ…！」
くそー今初めて辺境な村を恨んだ。

『ズルズル…』

引きずられて

小綺麗な牢屋に入れられた。

「だせーこのやろっ」

看守に頼んでみたが

「うっせーだまつてろ。」

「いたっ」

リンゴを投げられた

せっかく、来たのにこの扱いって・・・どう!?

〓1日後〓

「釈放だ」

「やっとか」

一日中寝ていただけなんだけどな

「身分を確認していた。校長が待っている」

「えっ、ってひきずらないで……。扱いひどいよ……!」
出所できた

〓校長室前!?!〓

「捕まえた少年を連れてきました。」

「入ってよいぞ」

「はい」

普通の校長室の中には、紫マントをかぶったババアがいた。

「これ、ババアいうな」

「えっ、俺の心が読まれた」

「お前は、わかりやすすぎなんだぞ。」

そして、ここまで連れてきた、憎き衛兵は、去って行った。

「ところで、ババア。なんで俺をよんだ」

「だから、ババアいうな。わしの名前は、モーガンぞ」

「モーガンのババアもう一回聞くなんで俺を呼んだ。」

「ババアいうな」

その時、体中に激痛が走った。

「いたっ」

おれは、Mじゃないんだぞ。

「お、やはり耐えおったが、フオフオフオー」

「不気味な笑いするなババア」

「口が悪いが、まあいい。それでは、ついてこい」

「廊下」

『ズルズル~~~~』

「つてっかなんで、また引きずられてるんだーーーーー」

「口では、聞きそうにないからの」

場所変わって

「講堂」

「みな、集まったかの」

「はい、集まりました。」

前には、メガネをかけた。美人のお姉さんがいた。

「では、皆の衆、紹介しよう新入生のカイトだ。」

「だっ広い所だな」

そして周りには、大勢の学生がいた。

「よろしく」

俺なりに手堅く挨拶を試みた

「早速、魔力測定をしてみよう」

変な機会が出てきた。

「カイト、それに触れてみる」

ババアが不気味な笑みをしていた。

「測定中 測定中」

「だいじょうなんか、こいつ」

「測定結果出ました。」

「火：0・水：0・風：0・土：0です。」

「あなたの数値は、オールゼロです」

『ざわざわ』

「ゼロだつてよ」

「なんであんな奴がこんなところにいるんだよ」

「魔法使えないのにねー」

散々なことを言われた。

「フオフオフオー。やはりな、皆の衆、よろしく頼むぞ」

そんなこんなで、魔力0の俺の学園生活が始まった。

第0話 はじまりの日（後書き）

修正・加筆しました。

今回は、カイトの学園生活スタート!?

第1話 ご飯を恵んで・・・

入学から

3日後

学校・中庭（放課後）

「いや3日もたったかでも、暇だなー」

魔法の使えないが、俺が授業を受けたところで何も変わらない。
実習も眺めているだけだ。

みんなも俺と同じ年齢なのにうまいよな

まあ、2か月も遅れてるからか。

『グウー』

「腹減った」

今日は、朝から水しか飲んでいない。
なぜかというと

「金がなーいー」

そうなのだ、持ってきたお金はすべて使ってしまった。
なんていつても、物価が高い。

学園の周りには、都市が出来ている。

いわゆる学園都市なんですよここは・・・

「トホホ・・・」

何もかも高い。

「高い！」

衣住は、タダなんだけど・・・
なぜ、食がない。

『グウー』

お腹がさつきからなっている。

『グーグー』

「おお二回なった」

「さつきからうるさいですわ!!」

話しかけてきたのは、金髪の女性だった。

「何回もなつて、みつともないですわ」

「しかたないだろ、何も食べないんだから」

「はあ!?何も食べてないですつて」

あきらめた顔をされてしまった。

「そうなんだよ」

「まったく、中庭で本も読めないわ」

確かに手に本を持っていた。

「中庭は、みんなの物なんだから」

「関係ありませんは!!」

強情な女だね

「じゃあ、何か恵んでくれよ」

「誰が、魔力ない奴にやるもんですか!」

「おお、俺つてそこまで有名人になつてたのか」

3日たつて、割り切った。

魔力ないのは、仕方ないもんね

「でも、これ以上なつてもうるさいですし、手伝つてくれたら、考
えてあげてもなくてよ」

「えっ、ほんとうか」

「嘘は言いませんわ」

堂々としていた。

「わかった何でもやってやるぜ」

「そう、では付いて来て」

〈学校・教室・1-B〉

俺の隣の教室だ

「ここにある本、図書館にもっていつてくださる。」

目の前に、大量の本があった。

「お前、どんだけ借りたんだよ」

「私の名前は、お前ではなく。エルフリーデですわ」

「じゃあ、エーデな」

「勝手に略さないでくださる」

「えーではないか、えーではないか」

「ご飯、あげませんわよ」

「すいません。エルフリーデ様」

「よろしい、ではいきましよう」

「あの〳〵何で、手ぶらなんですか」

「あら、私に持たせるき……“ご飯”」

「はいわかりました」

ご飯の前には逆らえないね。うん

〳学校・図書館〳

「はあ〳〵やっと着いたー」

腰が痛い

「ご苦労様」

「それで、エーデ、飯は」

「約束は約束だから、行きましよう」

〳学校・カフェ〳

なんとこの学校は、カフェとレストラン二つあるのだ。

「さあ、来ましたわ」

目の前に出されたのは、サンドウィッチだった。

「おお、ありがたい」

なんでもよかった。食べれるものなら

「食べるの早いですわね」

「腹減ってるからな」

「それでは、約束も果たせましたしこれで去って行った」

「エーデか」

性格は、あれだけど意外に優しい奴かな。

「次の日」

「教室・１－Ｃ」

「腹減った」

昨日恵んでもらったけど、お金がないのは、かわりない。

「働けば」

後ろから声が聞こえた。

銀髪の…名前は、確か

「フィリップなんだ」

「フィリップじゃない。フィオナ」

無関心そうな様子だ

「ごめんごめん、フィオナ。いい募集しているところでも知ってるのか」

「私のお母さんが経営している酒場で募集している」

「それはラッキー、行ってもいいか」

「帰り付いて来て」

「分かった」

「学園都市・デヴェテンテ（放課後）」

「ここが私のお母さんが経営している。デヴェテンテ」
小さな酒場だった

『カラン カラン』

「おお、お帰りフィオナ」

「ただいま、お母さん。働く人見つけてきたよ」

「それは、早速面接しないと」

いかにも酒場のおかみっていう人がこっちに来た

よし合格してやるぜー

「カイトと言います」

名前は大切だよな

「よし、合格!!」

「えっ!? 何で」

「何でって、名前が気に入ったから」

本当に名前は重要だった!!

「よかったね」

「日給にしてくれませんか」

お金がないから今すぐに欲しいぐらいだ

「ああいいよ、今日から働いていつて」

「ありがとうございます」

その後、ひたすら働いた。

「お疲れさん、もうあがつていいよ」

10時くらいに声をかけられた。

「まだ、大丈夫ですよ」

「いい心がけだね、それじゃあ頑張つて」

ちよつとでも、お金が欲しい。

日付が変わろうとしていた

↓次の日（深夜）↓

「よく頑張つたね、はい。お給料とまかないだよ」

「ああありがとうございます」

「お疲れ」

「お疲れさん」

フィオナもこの時間まで手伝っていた。

「それじゃあ、明日もよろしくね」

「こちらこそよろしく願います」

まかないを食べた後、部屋に戻った。

「まかないおいしかったな」

〈教室・1-C（朝）〉

「朝に、ご飯を食べるのは、幸せだな」
満腹になっていて、満足していた。

〉（1時間後）〈

「ふあゝゝ、眠い・・・お休み」

.....。

.....。

.....。

〈授業中たぶん〉

「こら、起きろ」

『バシッ』

「いったいなー」

「授業中寝るとは、最悪だな」

目の前に青髪の女性がいた。名前は確か

「はい、はい。わかりました。シルファイ」

「シルヴィアだ。」

睨まれた

「すまん。すまん」

「しっかり聞けよ」

「りょゝかい」

『スヤスヤ』

『ガンッ』

「起きろー」

「いったつ、殺す気か」

「いっそ、死んでくれた方がいいかもな」

「ひどすぎる」

頑張って起きていた。

「終わったー」

「今日も、頑張って労働しますか。」

そうやって、こっちに来て、初めての休日を迎えた。

第1話 ご飯を恵んで・・・（後書き）

修正・加筆しました。

次回は、カイトが初の休日を迎えて・・・???

第2話 平和な休日を求めて

「初めての休日（朝）」

「こつちにきて、初めての休日だー」

なんといつても、学園都市は活気がある。

それに、俺の懐にお金もある。

「ヤッホー」

「市場」

「にぎやかだな」

たくさんの人で賑わっていた。

いろいろなものを売っていた。

「うちの林檎は、やすいよ」

「いい生地入ってきましたどうですか」

「王都から、薬が届いたようだーい」

「姫様どこですかー」

姫様大丈夫かよ

そのまま市場散策していた。

「うえ~~~~ん」

泣き声が聞こえた。

その方に行つて見ると、ちょっと白みがかった黄色の髪の毛の小さな女の子がいた。

「よしここは、人助けと行きますか。」

「あの、大丈夫」「あの 大丈夫かな」

声が重なった。

隣には、茶髪の女性がいた。

「迷子になったの」

「よし、じゃあお兄ちゃんとお姉ちゃんで見つけてあげよう」
ウィンクしてみた。

「そうだよ、どこでお母さんとはぐれたのかな」

「市場で買い物してた時、エレナが勝手に逃げちゃったから」

「そうかーエレナちゃんて言うんだな、よし一緒に探そう」

「探しに行きましょう」

「エレナちゃんのおかあさん」

「エレナちゃんのお母さんいませんか」

「お母さん」

……。

…。

「ああ、お母さん」

見つけたようだ。

エレナちゃんのお母さんも、白みがかった黄色の髪で気品であふれていた。

「あら、娘のエレナを探してくれてありがとうございます。それでは、またご縁があったら」

「それじゃあ、またねエレナちゃん」

「またね」

「うん、バイバイお兄ちゃん、お姉ちゃん」

二人、手をつないで帰って行った。

見えなくなった時に隣にさっきの人がまだいた。

「一緒に、探してくれてあんがと、えーと名前は……」

「王立魔法学校学生のパティナと言います。こちらこそありがとうございます」

「同じ学校なんだ。俺は、1年のカイトだよろしく」

「同じ学年なんですね。私はA組です」

「俺は、C組」

「カイトさんそれでは、用事があるのでこれで、あとウィンクはしない方がいいですよ」

『グサツ』

刃物で刺されたみたいに心が傷ついた。

「ああ、またな」

ウィンクは、封印したほうがいいのか・・・

昼時になっていた。

適当にお昼食べて、観光することにした。

く噴水前（夕焼けが見えるころ）く

「いやー夕日きれいだねー」

心が落ち着く。

感慨にふけていると

「おい！！服にアイスクリームがついたぞ！」

「許してください」

いかにも悪そうな人が親子に絡んでいた。

「これは、弁償だな」

「お母さん許してあげてよ」

「うるさいな！小娘」

殴ろうとしていた。

「ちよつとぐらいで、怒らない方がいいだろう」

そこを止めに入ったのは、赤髪の女の人だった。

「なんだとこの野郎」

「大人げないと言っているんだよ！！！」

「俺は、魔法が使えるんだぞ。けがしてもしらないぞ！」

「魔法で来るなら・・・こちら魔法で」

「触即発だった。だから、

「まあまあ、お二人さんとも気を静めて、ここで騒いでもいいことありませんよ」

「なんだお前は、引つ込んでいろ!!」

「そうだ、君が出てくるところなんてないよ!!」
ちよつとむかついた。

「二人ともつかまりたいんですか。ここでドンパチやれば、衛兵が来ると思っんですけどー」

「確かにここでは魔法をつかえない」

女の人がバツ悪そうな顔をして言った。

「まあ、そうだな。けつ、つけにしといてやる」

悪そうな人は、どつかいつてしまった。

「ありがとうございます」

本日2回も感謝された。やっぱり人助けはいいね。

女の人が、こつちに来た。

「さつきは、すまなかった。冷静さをかけていたようだ」

「いえいえ」

「私は、王立魔法学校のジェシカだ、よろしく」

「俺も魔法学校の1年C組のカイトだ、よろしく」

「同じ学年か、私は1年B組だ」

1-Bというと、エーダのクラスと同じだな

「同学年か、よろしく頼む。救ってもらった例に夕食をおごるよ」

「救ってもらったって、大げさな。でも、夕食はおごってもらいます」

やっぱり素直が一番だね。うん

「そうかそうか、では行こうか」

今日はやたら同学年と会うな

着いたところは・・・

「デヴェテンテ（太陽が見えないくらい）」

「なんだ、デヴェテンテか」

「おっ、お前知っているのか」

「知っているも何もここで働いていますから」

「そうか、いつからだ」

「えーと、3、4日前ですね」

「そうか、最近来てなかったからね。まあ入ろうか」

『カランカラン』

軽快なベルの音が聞こえる。

「いらつしやいつて、ジェシカちゃんじゃないか！」

「こんばんは〜！」

「それに、カイトじゃないか。」

「どうも〜」

「どうしたんだい2人そろって」

「さつき、助けてもらって。そのお礼にだよ」

「そうかい、そうかい。かつこいいとこ見せちゃって、よっ男前」

「やめてよ、増長しちやいますよ。俺」

フィオナがエプロンをつけて出てきた。

「こんばんは、カイト」

「こんばんは、フィオナ」

「じゃましているぞ、フィオナ」

「こんばんは、ジェシカさん。さあ席に座って」

「休日も働いているんだ!？」

「そうだよ。カイトも働く」

「いや、俺は休日ぐらいのんびり過ごしたいよ」

「そう」

少し残念そうな顔をしていた。

「さあ、わたしのおごりだ存分に頼んでくれ」

「よし、じゃあこのメニューの左端全部」

「君は、遠慮というのをしらないのかね」

視線が殺気立っていた。

「っていうのは、冗談で鶏肉の香草焼きで」

「はい、鶏肉の香草ね」

「君は、面白いね」

突然言ってきた。

「そうですかねー魔力ないですけど」

言って悲しくなってきた。

「君が、噂の魔力がない男子か」

「そうですよ」

「ますます、面白い君は、気に入ったよ」

「ありがとうございますね」

その後雑談したり、食べたりした。

なぜか、途中からフィオナも入ってきた。

「ありがとう」

「こちらこそ」

「お店に来てくれてありがとう」

別れの挨拶をして、部屋に戻った。

騒がしい休日だった。

明日こそ平和な休日を・・・

第2話 平和な休日を求めて（後書き）

修正・加筆しました。

次回、カイトは、平和な休日を手にいられるのか！？

第3話 続 平和な休日を求めて (誘拐編)

く休日・2日目く

「昨日は大変だったな」

今日こそそのんびりしたいものだ。

く噴水前(朝)く

『ザアー』

「噴水の音はいいな」

噴水の周りは、パフォーマンズをしている人や、楽器を演奏している人たちがいた。

日陰のベンチに寝転がって

「朝から寝るとか・・・まあいつか」
意外に早く寝れた

『スヤスヤ』

.....。

.....。

.....。

く噴水前(朝か昼?)く

「ふあ、今何時だろう」

『グウ』

お腹が鳴った。

昼ぐらいか

「飯食いにいこ」

適当な屋台で買って食べた。

「腹七分目くらいかな」

「市場（昼過ぎ）」

「ああ、お兄ちゃん」

お兄ちゃんって、妹もった覚えないけどな
妹ぐらい一人ほしいよな、やっぱりうん

「お兄ちゃん」

袖を引つ張られた。

「おお、お前は、エレナちゃん」

昨日会った子がにこにこしていた。

「無視するなんてひどいよ、お兄ちゃん」

ちよつと頬をふくらましていた。

「もう一回いつて見て、お兄ちゃんって」

「うん、いいよお兄ちゃん」

なんかいい気分になる。

「どうしたんだ。また迷子か」

「うんうん、今日はつまらないから抜け出てきたの」

「おいおい、大丈夫なんかよ」

「大丈夫だよ」お兄ちゃん一緒に市場観光して」

お兄ちゃんと言われたら、だれでも頷いちゃうでしょ。

「OK、わかった」

「やったー」

この可愛い笑顔さえ見れば満足

「お兄ちゃんが、何でもおごってやるから」

調子に乗った

「やったーうれしい。はやく、いこ」

袖を引つ張られた。

目が輝いていた。

場所変わって

く市場く

「昨日と同じでにぎわっているな」

「あれなに」

「あれは、林檎アメだよ」

「りんごアメ？かってかって」

「よーしわかった」

「あれ何」

「あれはな」

・

・

・

・

・

「おなかいっぱい」

「懐がさびしくなったー」

可愛い女の子のためじゃしかたないか

「次何したい」

「あれ、あれ」

「輪投げか。よし行こう」

く輪投げや前く

頑張って入れようとしていたが、なかなか入らない。

「はい…らない…よ」

涙が目からこぼれそうだった。

「泣くな泣くな、お兄ちゃんが取ってあげるよ」

「本当やったー！」

涙が太陽で輝いて見えた。

「お客さん…すべて入ったよ」
輪投げのオツチャンが驚いていた。

『ザワザワ』

「すごい」

「すごいですは」

「ふん、どうだ。祭りのころに、輪投げを散々してたからな」

「お兄ちゃんすごい」

エレナちゃんは、騒いでいた。

「はいよ、一等賞のヤギのぬいぐるみだよ！」

「うれしい！！。ありがとうお兄ちゃん！」

ヤギのぬいぐるみって、もうちょっとましなのなかったわけ

「それじゃあ、休憩しよう」

いつもの場所に行きますか

くデヴェテンテ（おやつの時）く

「いらっしやい、ってカイトか」

おばさんが元気な声で言った。

「どうも」

「こんにちは」

「おやおや、昨日はジェシカちゃんをつれて。今度は、女の子かい」

「私の名まえはね、エレナっていうんだよ」

「そうかい、そうかい。エレナちゃんかい」

「おばさん、飲み物と、エレナちゃん何か甘いもの欲しい？」

「ほしい！！、ほしい！！」

目が太陽みたいに輝いていた

「じゃあ、適当に甘いもの」

「はいよ」

デヴェテンテは、酒場だけど、昼などは普通の食べ物屋になってい

る。

「はい、デラックススーパーパフェだよ」

「おいしそう」

目の前に出てきたのは、とてもでかいパフェだった・・・

「おいくらなんですか・・・」

「あなたの給料二日分」

「はああー、いじめですか」

「あんたが、適当についていったからじゃないか。それに男なんだから」

「もう、いいですよ」

「おいしい」

「そりゃ、よかったよかった」

「俺は、よくないですよ・・・」

『パクパク モグモグ』

どんだけで、食べるんだ。どこに入って行っているのか不思議だった。

「そういえば、フィオナはどこなんですか」

「ああ、フィオナは、川に泳ぎに行ったよ」

「川ですか」

「あの子泳ぐの好きでね」

「へえー、泳ぐの好きなんだあいつ」

ちよつと意外だった

『パクパク、モグモグ』

・

・

・

・

眺めているだけでどんどん減って行った。

おいしそうに食べている様子が面白かった。

パフェの底が見えてきたときに

「ああいた」

「みーつけた」

あやしい黒服の2人の男が入ってきた。

「おまえ、よくも、さらったな」

「あのー何言っているのかわからないんですけど」

「お前を連行する」

「えっえっちよつと」

二人して俺を捕まえようとしていた

袖を引っ張って

「お兄ちゃん、にげよう」

あやしいから、ここは逃げるが勝ち

「よし来た。必殺」

『バッチン』

「猫だまし、いくぞエレナ」

「この野郎」

「おばさん、裏口かりますよ」

「はいよ、頑張んな」

楽しんでいる様子だ

「待ちやがれ」

起き上がって、こっちに来た

「必殺、フオーク投げ」

足に刺さった

「ぐは」

痛そう・・・

ダーツの経験が役に立った

（裏通路）

「なんで、追われているんだ」

「とりもどそうとして、おっかけにきたんだよ」
申し訳なさそうな顔をしていた。
なんか、また巻き込まれたな

〈市場〉

「すいませーん、どいてくださいー!!」
人がたくさんいたので、そんなに早く進む事が出来なかった。
「おい、待ちやがれ!」

「お前は、カイトなんでこんな所に!？」
俺の名前を読んだのは、

「おおシルヴィアか、助けてくれ!!」
「何事だ!？」

不思議そうな顔をしていた。

よく見てみると、袖に「風紀」と縫ってあった
「急に追いかけられているんだよ」

「そうなのたすけて」

「この子って、お前。」

急に顔色が変わった。怒っているような・・・

「なんだよ」

「風と土の力を合わせて、トネレ（雷撃）」
『ゴゴー』

横の道路の石が黒くなっていた。

「わぁ！何するんだよ」

「この誘拐犯め!!」

「えー!!!!なんでー!!!!!!」

「こちら、シルヴィア。誘拐犯を見つけた。ただちに応援頼む!!」
魔法石みたいなので連絡を取っていた。

シルヴィアまで、敵にまわってしまった。

「よっし、エレナ」

担ぎ上げて、お姫様抱つこの体勢になった。

「わぁーたのしい」

この状況楽しんでいますよ・・・まったく

「それ！、走れー！！」

「まてー！ー！！」

「待ちやがれ！！」

「お待ちなさい！！」

「こちら！、ポイントA - 15で発見」

なんか増えてないか・・・

「風紀」と書かれた刺繍の人や、黒服の人に追われながら・・・

逃げることになった。

第3話 続 平和な休日求めて (誘拐編) (後書き)

修正・加筆しました。

次回・・・カイトとエレナんの運命は……

第4話 続 平和な休日を求めて (捕縛編)

く市場く

「くそつたれ」

疲れたー

人が多いため、魔法を使ってこないのがラッキーだった。

「待ちやがれ」

「まてー」

黒服の男が数人とシルヴィアが追いかけていた。

「あつかんべーだ」

『バン、ゴゴゴ』

周りが閃光に包まれた

「まてーカイト」

後ろの道が粉々になっていた。

「やばー!!」

方向を変えてみた。

「いけいけ」

当の本人は、楽しんでいるようだが

く裏路地く

薄暗い狭い路地に俺たちは隠れた

「ハァーハァー疲れたーここまでは来ないだろう」

「だいじょうぶ？」

「大丈夫、大丈夫」

何でこんなことになっているのやら

「どうして、追われているの」

「お母さんにあいたかったから」

「お母さんって昨日一緒にいた？」

「うん、ひさしぶりにあって、たのしかったのにおし」といっちゃ

って」

悲しそうな顔をした

「そうなんだ」

「だから、あいにくこうとおもったの」

「そうか、わかった。どこにいるんだお母さんは」

親子の再開を手助けしますか

「ウルスラ庁にいる」

ウルスラ庁といえば、噴水から北東に行ったところだったかな

「お！、見つけたぞお前！！」

黒服の男が一人いた

「くそ、エレナ下がっている」

横に置いてあった。モップを取って

「今ここに、水と風の魔法を合わせて」

なんとなく授業で言っていることを思い出して。

「何、お前魔法使えるのか！」

ビビッていた

「お兄ちゃんすごい」

「かっこいいとこ見せてやる」

「必殺 モップとばし」

「えー」

「わぁおもしろい」

『バシッ』

見事に命中した。

「どうだ、さぁお母さんに会いに行くぞ」

「うん」

（ウルスラ庁に行く途中）

「秘儀！、りんご投げ」
「ぐは」

「必殺！、バナナの皮」
『ツル』
「うは〜」

「奥義！、樽落とし」

『ゴロゴロ』

「うは〜」

「ぐは」

「ま…て…」

『カッーン』

「ストライク」

「すごい！！、すごい！！」

そんなこんなで

〜ウルスラ庁前〜

「着いた」

立派な白色の建物がある

嬉しそうな顔をして

「ついた！ついた！」

だが……

「そこまでだ」

門の前にシルヴィアが立っていた。

「シルヴィアどいてくれ、感動の親子の再開をしないと」

「黙れ、者ども困え」

あっという間に囲まれた。

「もう終わりだ」

「さあおとなしく捕まれ」

「ここまでかな」

おとなしく捕まることにした。

殴られるのは、痛いもんね。うん

捕まった。

「お兄ちゃんを離して」

こつちに来ようとしたが、男たちに阻まれていた。

「エレナ様危ないですよ」

「カイトお前は、犯罪を犯した。罪を償ってもらっぞ」

犯罪だの罪だの何言っているかサッパリだった。

「子供一人親に届けに来ただけだろ。くっそ、離せ!」

「さあ!、こいつをつれていけ」

俺の人生ってここでお終い!?

1か月もかかって来て

魔力0ですって言われて

そんなんじゃ終わりなの・・・

「お待ちなさい!!」

一帯に威圧感のある声が鳴り響いた。

正門から出てきたのは

「ああ、お母さん」

昨日一緒に歩いていた人だった。

でも、着ている服がとても豪華なドレスだ。

その人が、神様に見えた。

「娘のエレナのがまを聞いてくださってありがとうございます」

「いえいえ、そんな」

なんだかこつちが、かしこまってしまっ

「お母さん、お兄ちゃんなんにもわるいことしてないよ」

「はい、わかりました。下がりなさい！」

「はい……しかし」

「いいから、下がりなさい」

威厳があつた

「は、はい……！」

囲んでいた人たちがどっかにいった。

「ありがとうございます。私の名前は、ベアトリスこの国の女王をしております」

微笑んだ。どことなくエレナと似ていた。

「つて、えー……王女様」

神様じゃなくて王女様だった。

「はい、そうですね。この子は、娘ですの。」

「エレナつて、姫様だったんだ」

新事実発覚……！！

「えっへへ、そうだよ」

「はあーしつかしなんで、ああすいません言葉づかい悪くて」

「いいですよ、私とエレナは、王都に住んでいて。公務のためこちらに来たため、一緒に連れてきたの」

「そうなんですか」

「でも、エレナ。今日王都に帰らないといけません」

「えっ、なんでお母さんもとお兄ちゃんと遊びたい」

「うれしい事だけど」

男としては、うれしい言葉だね

「わがまま言つては、いけません。えーとすいませんお名前聞いていませんでしたね」

「カイトです。エレナまた会えるさ」

「ほんとーう？」

首をかしげた。

「本当だよ」

「もう少ししたら、馬車の準備が整います。カイトさんこれであることを思い出して、走った。」

「どこいくのお兄ちゃん」

「少し待ってて」

ウィンクしてみた。

「ある所」

忘れてたよ、渡すものがあつた。

「ウルスラ庁前」

エレナが馬車に乗っていた。

「間に合った。」

汗が出ていた。

たつく、今日どんだけ走ったことやら

「あつ、お兄ちゃん」

「はい、忘れ物、デヴェテンテに置いて行っちゃったんだ」
輪投げで取った。大きなヤギのぬいぐるみを渡した。

「ああ、本当だ」

「また、いつでも会いに来い、待ってるから」

「うん、わかった」

「それじゃ、またこんどな」

「うん、またね」

手を振っていたエレナの笑顔は最高だった。
夕日で輝いた馬車は、とてもきれいだった。

「いや」今日は、いい日になったよ。うん。なったなつた。

「デヴェテンテ」

疲れて、お腹がすいたので、デヴェテンテに立ち寄った。

「おお、大丈夫だったか」

「はい、大丈夫でしたよ」

「そうか、それはよかった」

「はい、良かったですよ」

命がいくつあっても足りないぞ

「ところで、皿を割ったり、机や椅子を破壊したから、減給だよ」

「え……えー！ー！！そこは、懐の大きさを」

「そんな物ないよ、あるのは壊れた物だけだよ」

「そんな〜」

前言撤回。やっぱよくわないわ・・・

俺に平和な休日はいつ来るのやら・・・

その後この事件は、学校中を駆け巡り

俺の知名度を上げるのに一役買った。（ある意味で）

第4話 続 平和な休日を求めて (捕縛編) (後書き)

修正・加筆しました。

次回は・・・新たな戦いが始まる！？

第5話 食べ放題券までの道けわし

誘拐騒動の次の日

〔学校・廊下〕

『ザワザワ』

「あの人が、お姫様を誘拐したんだって」

「わたしは、幼いお姫様を手籠めにしたんだってきたけど」

「ウソー魔力ないくせに、やることあげつないね」

「ほんとだよね」

ああー、鬱になっちゃうよ俺

フィオナと会った時

「…最低」

エーデに会った時も

「あなたがそんな人だとは思いませんでしたわ」

フィーナは・・・

「まさか、ロリコンだったなんて、だからあの時助けたのね」

でも、ジェシカだけは・・・

「やっぱり、君は面白いわ」

どう、この扱い。

前までは、魔力0だったけど、今回はきついです。

「カイト。モーガン様がお呼びです」

声をかけてきたのは、前に講堂であった美人のお姉さんだ。

「わかったよ」

（校長室）

「バアさん何かようか」

「バアさんとは、口が悪いのは治っておらようじゃのう」

「いや、ババアからバアさんに変化した」

「アホか」

「生徒に向かってアホないだろ」

「まあ、そんなことはいい」

「無視ですか・・・」

「お前は、女をはべらす趣味でも、あるのか」

「女って、はべらしてもないよ」

「お前が出会った四人のおなご達の魔力データみてみるがいい」

「なんだよ急に」

書類が渡された。

ーエルフリーデー

火：1・水：1・風：1・土：5

ーフィオナー

火：1・水：5・風：1・土：1

ーファイナー

火：1・水：1・風：5・土：1

ージェシカー

火：5・水：1・風：1・土：1

4人の名前が書いてあった。

「ババア何で俺があつたことを知っているんだ」

「そんなことはどうでもいい、これを見て何か思わんか」

「1ばつかじゃないか」

「やはり、馬鹿は、バカじゃのう」

「うっせーバカバカいうな」

「この4人とも、能力が偏っているんじゃないよ」

「ああ確かに、1と5しかないもんな」

「5がどれぐらいすごいのか、お前さんわかっておらんようじゃの」

「で、どれくらいなんだ」

「世界に数百人しかないんじゃないぞ」

「世界に数百人もいればましじゃん」

「あほか、うつけ者!!」

「うつけ者でも、つけ者でもないわー」

「はぁー…久しぶりに叫びすぎたわい」

「そのまま、逝っちまえ!」

「口数の減らんガキじゃの」

「用事はすんだか」

「もう、すんだわ。とつとと出てけ!!」

「言われなくても出ていくわ!」

毎回むかつくこと言ってくるよな、あのババア。
しっかし、あの4人そんな力があるなんてな。
実技は、さぼってたし仕方ないか

時かわって

く学校・レストラン（お昼休み）く

「ああーひもじい」

昼ごはんは、パンだけ

く注文する時く

「パンください」

「メインは、何にしますか」

「パンで」

「えっ……」

「パンだけでいいですから」

「……はい、かしこまりました」

「パンお持ちしました。ごゆっくりどうぞ」

・
・
・
・

泣けてくるぜー

お金がないのは、憎い

今週、給料が少なくなってしまった。

「朝と、昼パンのみ」

こんな日が、二週間続くの最悪だー

「カイトじゃないか、またあつたね」

ジェシカがいた。

「よっ、ジェシカ」

「君の食事は、パンだけかい」

「そうなんだよ、昨日のせいだ」

「それは、災難だったね、風紀委員にも追われてたんでしょ」

「風紀委員？確かに風紀って刺繍つけた人たちには、追われたけど」

「その人たちよ」

「シルヴィアもいたような」

「シルヴィアも風紀委員所属よ」

「へえーそうなんだ」

新しい情報入手。

「では、用事があるのでこのへんで、またねカイト」

「ああありがとさん。ジエシカ」

く学校・魔法実習場（午後）く
学年合同実習だった。

くその終了間際く

「モーガン様からお話があります」

「ふむ、明日から学年総当たりトーナメントを開催する。」

『ウオー』

『ザワザワ』

『ガヤガヤ』

「盛り上がってるなー」

「ルールは簡単。相手が「降参」と言うまで、戦う事じゃ」

「えっ…魔法使えないんですけど」

「なお、優勝者には、特別賞として勲章を授けよう」

「勲章なんていーらね」

「準優勝者には、1週間レストラン食べ放題券を進呈する」

「なに！！！！」

食べ放題、食べ放題。食には勝てないね

これで、今後の金銭面の問題が解決する！！

「よっし、やってやるぜ！！」

「では、明日の朝一でくじで決める。解散」

くデヴェテンテ（夜）く

「フィオナ頑張ろうな」

「なんで、そんなに気合入っているの」

「そりゃ、食べ放題だぞ食べ放題」

「ああ、準優勝の」

「そうそう」

「頑張つてね」

「ああ、頑張つてやるぜー」

そして、翌朝

（学校・魔法実習場（朝））

「それでは、くじを引いてください」

「俺は、C-14つと。対戦相手は・・・」

「私よ」

「えっ…フィーナか」

「あなたなんで、魔法がないのに出たの」

「そりゃあ、誰にも譲れないものがある」

食だ~~~~~

「そう、お互い頑張りましょう」

「おう」

「試合開始！」

いろいろなところで、試合が始まった。

「俺は、3番目っ」と

あっという間に、出番が来た。

「フィーナ対カイトの試合を開始します」

フィーナ

火：1・水：1・風：5・土：1

カイト

火：0・水：0・風：0・土：0

俺の食べ放題券をかけた戦いは、始まった。

第5話 食べ放題券までの道けわし（後書き）

修正・加筆しました。

書いていると、「食」ネタが多いです。地盤が固まるまで、食ネタが続くと思うので、あしからず。

次回は、ようやく、バトル、バトル!!、バトル!?

第6話 食べ放題券争奪戦！？（フィーナ編）

（魔法実習室）

「フィーナ対カイトの試合を開始します」

フィーナ

火：1・水：1・風：5・土：1

カイト

火：0・水：0・風：0・土：0

「フィーナ準備はいいか」

「そちらこそ大丈夫なんですか」

「いろいろと仕込んできたからな！」

「勝つ気満々ですね」

「ああ」

ひええーこえー。バアさんに強いと言われているからな。

「いきますよ」

「攻撃宣言ありがとうな」

確か、フィーナは風が一番高かったな

フィーナが動き出した。

「風の力をここに、フロートベント《突風》」

「うわっ」

とつさに右によけた。

『ドッン』

「あつぶね」

あんなのくらったらつぶされるな

「威力はんばないな」

「まだまだ、ベントベレー《風弾》」
弾みたいなのが、飛んできた。

『ビュン、ビュン』

くらったら八チの巢になりそう

これもまた、強いな

「いやー強いねー」

「なんでそんなに余裕なの」

「俺は、強いからな」

嘘も戦略のうちってね

見かけによらず強い。

やっぱり外見で判断しちゃだめだね

「本当の力出さない」

「わかりましたよつと」

やられっぱなしもかつこ悪いからな

反撃開始といきますか

「ダーツいっけー」

両手から、4本のダーツを投げた

『ビューン』

「ベントボンクレア《風盾》」

『カーン』

ダーツが飛んで行った。

反撃失敗

「子供だましだね。カイトさん」

「ダーツの腕に自信があつただけだね」

「風の前には無意味ね」

「やってみなきゃわかんないぜ」

「ダンスデュベント《風舞》」

風の球が浮いていてこっちに一斉に来た。

さっきよりも、速い

『ビュン、ドン、バン』

やばいよけきれない

「いたっ」

足をけがしたみたいだ

でも、骨折はしていないようだ

足がふらついた。

「うわ」

「スキあり。ダンスデュベント《風舞》」

『ビュン、ドン、バン』

先ほどと同じ技だった。

よけきれない

「えっー」

やば、俺逝ったかな。

『ドカン』

「ぐは、…げぼげぼ」

やば、結構くらったな

一瞬三途の川が見えたよ。まったく

「降参しないの」

「まだしねーよ。それにフィーナも疲れてきていないか」

フィーナは肩で呼吸していた。

「そんなこと、ないわ…よ。ベントベレー《突風》」

『ヒュン、ドン』

「はぁーはぁー。ごほん、ごほん」

まったく、初戦からこんなに苦戦していいのやら。

「まったく、筋肉痛決定だ」

こんな、防戦ばっかでかつこ悪いな

「意外に逃げ足は、速いですね」

「それほどでも」

「まだ戦うの。とつとと、降参しなさい」

「まだまだー」

懐に入り込んだ。

「フロートベント《突風》」

「ぐはぁ」

手に触ったのだが、吹っ飛ばされてしまった。

その時、体に何かが駆け巡った。

「痛いな！」

ついに体までおかしくなったか

「最終秘密兵器いくぜ」

「させません。ベントベレー《風弾》」

少しかすったが、

なんとかよけて

「いっくぜー。ビー玉大量まき」

『ザラザラ』

「えっビー玉って」

『ツル』

「きゃー!!」

すべって、バランスを崩した。

「チャンス」

懐から、果物ナイフを取り出して

デヴェテンテから、拝借したんだけどね

「とつどけー」

あと一歩だった。

届かなかった。

「あと一歩なのに」

その時、体が軽くなった。

「ラッキー、とどいた」

そのまま押さえつけて

首に果物ナイフを当てた。

「降参です」

「勝者カイト」

体が軽くなったのは、フィーナの魔法でもあったのかな

「まあいつか」

フィーナがこちらに歩いて来ていた。

「いい試合だったよ」

「こっちだつて」

「まさか、ビー玉だなんて思いつかなかった！」

「どうだ、俺の奇策は」

「魔法が使えなくて：お金がないことがわかった。」

「痛いことを」

「でも、おめでとう。次も頑張つてね」

「準優勝目指して頑張るぞ」

トーナメント初日は、終わった。

フィオナも勝ったということで、祝勝会を開いた。

（デヴェテンテ（夜））

「フィオナとカイトの勝利を祝して乾杯」

「明日試合があるんですけど」

「まあ気にしないしない」

「そうですね」

「そうだよ」

「フィオナがいうなら、ていうか何で2人ともいるんだ」

「ジェシカに呼ばれて」

そこには、フィーナがいた。

「まあ、気にしなさるな」

ジェシカ言うなら

「それでジェシカは勝ったのか」

「それは」

困った顔をした。

「開始一秒で降参したの」

フィオナが事実を言った。

「フィオナ余計なことを」

「別に言ってもいいじゃない」

「それよりも、どうやって、勝ったんだフィーナに」

ジェシカが話題をそらした。

フィオナが渋々ながら

「ビー玉よ」

ジェシカが、腹を抱えて笑っていた。

フィオナが、くすくすと笑っていた。

「ビー玉か、こりゃ傑作だな」

「その後に果物ナイフで」

「ああそのことはいつちゃ…」

時すでに遅く

「そういえば、果物ナイフがなくなっているんだが、カイトしらな
いか」

『ギクリ』

「何言っているだ。おばさん」

「このナイフ、家のだ」

フィオナがいつの間にか、ナイフを持っていた。

「フィオナいつの間に」

「カイト、また減給だね」

「そんな」

「そのナイフ高かったんだから」

わざわざ高いナイフを選んだのか俺

余計頑張らないとまってる食べ放題券

「そんな」

「頑張れよカイト!!」

「頑張つて…カイト」

「頑張つてねカイト!」

3人に憐みの目で見られた。

おばさんが空気を読んで

「みんな、食べて飲んで。さあさあ!!」

「よっし、盛り上げるぞ」

「わかった」

「はい」

「うん」

そんなわけで、賑やかな夜が去って行った。

明日の試合大丈夫かな・・・

第6話 食べ放題券争奪戦!？ (フィーナ編) (後書き)

修正・加筆しました

呪文は、フランス語、ドイツ語の単語を使用しています。

バトルによやく入りましたが、主人公の武器があれでいいのか少し迷いました。

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。

魔法の種類も募集しております。

次回は、バトル!？ バトル?? いったい何の武器がでてくるのやら……

第7話 食べ放題券争奪戦！？（フィオナ編）

翌朝

（魔法実習室（朝））

一つの剣を腰に掛けて今日を望んだ。
昨日忘れてたんだよね……

「レッグ対カイトの試合を開始します。」

レッグ

火：3・水：1・風：2・土：1

カイト

火：0・水：0・風：0・土：0

知らない男だった。まあメガネをかけていて、いかにも真面目そうだった。

「お前みたいな魔力0に負けるはずがない！！」
余裕そうな顔をしていた。

「勝手に言ってる」

飛び出した。

右ナツクル

「ふん、甘い」

鼻で笑った

「まだまだ」

「こつちも行かせてもらっぞ。水と火の力を合わせて、迷いに落とせ」

霧みたいなのが出てきた。

「ヴァイソン《幻影》」

周りに男が増えた。

「なにーーーー！」

「消え去れ」

『バシ、ゴン、ガッ』

ひたすら殴られた。

「ぐは、ゲホ」

「まだまだーーーー」

「そうとう、Sみたいだな…はあーはあー」

「もつと悲鳴を上げろ」

何とか立ち直った。

「うっせいな、お前の弱点はこれだ」

ビンに入った油を取り出し周りにまいた。

そしてマツチをつけて

『ボツオオ』

火をつけた

霧がなくなっって行った。

「なに！？」

「見つけたぜ」

近づいていき

「ここだーーーー」

股間をおもいつきし蹴った。

『キーン』

「あがつ、うがつ。うつつ」

股をおさえながら悶絶していた。

「はやく、降参と言え」

「誰が…お前…なんかに…」

「おらおら、はやくはやく」

さらに股間に蹴った。

「わかった。降参だ。やめてくれ」

「早く言えばいいのに」

「勝者カイト」

次の戦いは・・・

「自家製煙幕そして、果物ナイフ」

「きゃー・・・参りました」

知らない女の子に勝った。

そして・・・

（魔法実習室（昼過ぎ））

「フィオナ対カイトの試合を開始します。」

フィオナ

火：1・水：5・風：1・土：1

カイト

火：0・水：0・風：0・土：0

袋を後ろに置いた。

「まさか、戦うなんてね」

「ああそうだな」

「手加減はしない」

「少しぐらい手加減してくれないか」

「いや」

フィオナが動き出した。

「ワセラクゲル（水弾）」

「いきなり、容赦ないな」

水の弾だ。よけた。

「これが普通」

「こっちは、素手だけなのに」

水風船を出した。

「ウソはだめ。ワセラクゲル（水弾）
『パーン』」

はじけて中から赤色の水が出てきた。

「くそ、せつかく仕込んだのに」

「甘いよカイト。ワセラネデル（水針）
無数の針が飛んできた。

「くそっ」

かすり傷程度で済んだが、結構な数をくらった。
足が痛くなってきた。

「もう一回ワセラネデル（水針）」
後ろにおいてあった袋を取った。

「小麦粉シールド」
『バサッ』

小麦粉が空中に舞った。

「今だ、マツチで粉塵爆発」

『ドカッン！！』

「げほげほ。こっちまで、ダメージくらったよ」

爆風の威力が想像以上にすごかった。

「もう終わりなの」

ファオナの周りに水の障壁が出来ていた。

「魔法は、強すぎるだろいくらなんでも」

「これで終わりワセラクゲル（水弾）」
水の弾を出してきた。

「まだまだーアルミばら撒き」

小さいアルミの板が目の前に出された。

「そして、またマツチ」

アルミが火と反応して、強い光を放った。

「えっ！」

ふらついた。

「届けー！！」

果物ナイフは、空を切った。

フィオナは、水の力を使って高く飛んでいた。
でも、足をつかんだ

「離してワセラネデル（水針）」

いくつか当たってしまった。

その時、体に何かが駆け巡った。

「痛い…な！」

「触れただけすごいよ」

「まだだよ。こつちも必殺 投げ銭！！」

頼むこけてくれ！！

銅貨が宙に舞った。

「これやると心が痛くなる」

「簡単によけれ…え」

『ッル』

気づかないうちにフィオナの下に水たまりができていた。

倒れかけていた

「チャンス！！」

馬乗りになって、果物ナイフを首に当てた。

「…降参」

「勝者カイト」

「ふうー勝った」

「はやくどいてくれるかな」

「ああすまん」

フィオナの顔が赤くなっていた。

「なんで、赤くなっているんだ。どっか怪我でもしたか」

「…っ！なんでもない」

『プイ』

後ろ向きになって走り去っていった。

「大丈夫かな〜フィオナ」

くテヴェテンテく

「なあフィオナ。本当に大丈夫か〜」

「大丈夫。気にしないで」

と言いつつも、距離を取っていた。

「まったく女心がわかってないねー」

「何を言ってるんですか、おばさん！」

「それよりもフィオナに勝ったんだって」

「はい、あの時はたまたま水たまりができていたので運が良かったんです」

「わたし、あんな所で魔法使ったおぼえないんだけど」

「まあいいじゃん。運も実力の内ってね」

「わかった」

「今日は、祝勝会やらなくていいのか」

「はい、金がないんですよ・・・」

そうなんだよね〜

何せ勝つためには、道具がいるから当然金が必要。

魔法がどれだけいいのかわかるよ。

低コストだよね魔法は・・・

「明日勝ったらやってください」

「よしわかったよ」

「明日、準決勝だね」

「そうなんだよ」

「頑張ってるね」

「頑張るなよ」

「はい、もちろん」
そうして働いて帰って寝た。

（魔法実習室（朝））

周りにたくさんさんのギャラリーがいた。

『ザワザワ』

「なんで魔力ないのに勝っているんだいるんだ」

「ズルでもしてるんじゃない」

「たまたま弱い人と当たっているだけだよ」

聞こえないぞ聞こえない。なぐんにも聞こえない

対戦相手は・・・

「私よ、この前の件で借りがあるから覚悟しなさい」

「シルヴィアか」

この前ってエレナを救った時か

「ほどほどにしてくれ」

「全力でいかせてもらっわ」

「うわーおなげない」

「ついでにその口もしゃべれなくしてあげる」

げっ！！死亡フラグが立っているよね。この状況
前回使わなかった秘密兵器を持ってきた。

それは…この母さんの形見の剣……

剣の装飾は、何もなく。変哲な剣だった。

「それでは、準決勝シルヴィア対カイトの試合を開始します」

決勝までの最後の戦い。勝ってやるぜ〜〜

第7話 食べ放題券争奪戦！? (フィオナ編) (後書き)

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。

魔法の種類も募集しております。

こんな人物でほしいと言うのも募集しています。

次回は、カイトは、死亡フラグを取り去れるのか・・・?

第8話 食べ放題券争奪戦！？（シルヴィア編）

「それでは、準決勝シルヴィア対カイトの試合を開始します」

シルヴィア

火：3・水：3・風：3・土：3

カイト

火：0・水：0・風：0・土：0

開始と同時にシルヴィアが動いた。

「水と風を合わせて、エイスケゲル（氷弾）！」

先がとがった氷がこつちに来た。

右によけようとしたが、

「トネレ（雷撃）」

先に雷撃を放っていた。

氷か、雷撃どっちか受けるのを考えた結果・・・

『ビリビリ』

「痛い…な」

全身がマヒしているようだった。

「うごけないようですね、それでは、フレーム（火炎）」

今度は、炎が来た。

寝返りをして何とかよけた。

でも周りは熱い

「熱いな」

「もう、終わりですの」

「こつちは、閃光玉」

周りは一気に明るくなった。

「バンガマレ（城壁）」

目の間には、土の壁が出来ていた。

「水と土を合わせて、マールクバウム（木刺）」

『バーン』

木がこつちに迫ってきた。

よけたが、不利なのは、変わらない。

「まだまだいきますわよ！、エイスクゲル（氷弾）」

「くっそー」

左手にかすつて、血が出ていた。

左手に熱があつた。

距離は、だいたい10m位。

シルヴィアが余裕な顔をしていた。

「魔法が使えないのはこまったものですね」

「いや、俺が特別なんだ」

この世界には、必ず魔法は誰でも持っている。ただその数値が1だったりして使えない人がたくさんいる。ただその数値が1だつ

「特別って、随分自分を持ち上げますわね」

「お前だつて」

「遠距離魔法は、よけられてしまいますので、これでエイススチエウェト（氷剣）、ドナアスチエウエスト（雷剣）」

蒼白の細い剣と、紫色の細い剣が握られていた。

「そっちが剣なら、こつちも」

秘密兵器の剣を手を取った。

「最初から使えばよかったのに」

「ここまでやるとは思わなくてな」

「こつちから」

二刀流は、だてではなく

『カキン』

「くう」

「まだまだ」

『ザク』

「ぐはっ!!」

左腕をかすった。

それだけでも、電気が流れた。

一つの剣を防ぐともう一つの剣が来る。

タイミングが取りにくい

2本の剣が一拳に来た。

『カキン!!!!』

「重い」

「まだまだ、初心者だ…な!」

「うせっ!、言ってる」

その通りなんだが、まったくもって初心者。昔チャンバラごっこをしたことがあるだけだ。

『ブン』

『ブン』

『キンッ』

防戦一方で、まともに攻撃させてくれない。

……。

……。

その後何回剣を受けたか覚えてない。

剣と魔法の両方はきつい

体はぼろぼろで熱くなっていた。

だが、骨折はしていない。

「はぁ…はぁ…」

「降参しないの?、こんなんになって」

「倒れるまでは、降参しない！」

「それでは、まだいきましようか。」

体がほとんど動かなかった。でも、たまたま上にあげたら

『カーン』

2本の剣が宙に舞っていた。

「私の軌道がよまれた」

はつきり言つて、偶然です。

「剣がなくても、トネレ（雷撃）」

動けなかった。

咄嗟に剣で防いだ。

剣で切れるはずがないのにね

『ドッカーン』

周りに煙がすごかった。

「勝った……え!!」

俺の両隣は、黒く焦げていた。

体は、痛かったがそこまだった。

「カイト、お前…何をした!？」

「剣で切ったかな!？」

観衆がうるさくなった。

「魔法を切る剣なんて聞いたことない!どういうことだカイト!!」

「俺だつて知らないよ」

そう俺がこれをもつたのは・・・

（俺の村（出発前日））

「村長なんですか」

「お前にこれをやろうと思ってな」

一つの剣を渡された。

「何ですかこれ」

「お前の母親の形見だ」

「えっ！！母さんの…」

俺の母さんは、生まれて2、3年後に死んでいる。
黒髪が長くてきれいだったのは、覚えている。

「ああそうじゃ、病死で死ぬときに・・・もし、カイトがここから旅立つときが来たらこの剣を渡してください」と言われている」

「これが母さんの……………」

「ああそうだ」

何の変哲のない剣だが愛着が持てた。

「ありがとう、村長」

「気にすることはないわい。ほっほっほっ」

「母さんの形見……………」

「まぐれですわフレーム（火炎）」

2つに裂けた。

「これなら、マーラクバウム（木刺）」

『ガシ』

「いたっ！」

切り裂けなかった。

さっきなんで二つに分ける事が出来たのか謎だ。

「やつぱり、さっきのは…まぐれね！」

「ああ……………そう…かも!？」

やばい、完全にこの剣を頼ってた

唾をのんだ

「エイスクゲル（氷弾）」

剣で防ごうとした。

『グサッ』

「…………え」

自分のお腹あたりに刺さっていた。

「わーーーー！！！！！！！！！！痛い痛い」

「大丈夫か!？」

「もうだめかも…………」

『カクッ』

「おい!!」

足音が聞こえた・・・

「あれ…………痛くないかも…………
起き上がった

「お…お前、幽霊か!!??」

シルヴィアの顔が青白くなっていた。

「体は痛いところないよな…うん」

戦闘での痛みが残るだけで、お腹は痛くない。

「試に」

左手に向かって思いっきり切ってみた。

『ザクリ』

「……………きゃーーーー！！！！！！！！！！」

観客の女子が一斉に悲鳴を上げた。

「お前ついに頭がおかしくなったか」
シルヴィアが先ほどと同じ顔をしてた

「切れないよな〜」

何度も切ってみる

『スパスパ』

「やめて、見ているこっちが変になる」

「わかった。わかった」

この剣の決まりがわかった

「これで、終わりにしましょう。マールクバウム（木刺）」

避けたが、左足をかすった。

そこから、血が流れ出した。

「まだ倒れないとは・・・エイスクゲル（氷弾）」

避けた。

「まだまだ、チャンスは一回」

「何ぶつぶついつてますか」

「気にすん…な」

一気に距離を詰めた。

「自分からあたりに来るとは、これでトネレ（雷撃）！！」

「勝った！！」

目の前に来た雷撃は、切れた。

剣を捨てて、果物ナイフを取った。

「終わった」

「え……私が…負けた……………」

「はやく、降参と言って」

「降参します」

『ザワザワ』

「おい、勝っちゃったぞ」

「シルヴィアさんが負けるなんて」

「おいおいこれからどうなるんだ」

いろいろな声が聞こえた。その場で腰を下ろした。

「はあ~~~~~疲れたー」

「さっきの剣は何なんだ？」

「ああーあれは」

答えは一つ

「切れないものを切って、切れるものが切れない剣」

「きれないものを切って…切れるものが切れない剣!？」

「たぶんそうだ」

「今回は、それがあつたから勝つたんだ次は勝てると思うな!！」
悔しそうな顔をしていた。

「はいはい」

そうして、準決勝は終わった。

「フィオナ悪いが、今日は休むは」

「わかった。お休み」

今日の夜は一日中寝ていた。

〳次の日〳

「決勝戦 カイト対エルフリーデの試合を始めます」

第8話 食べ放題券争奪戦!?(シルヴィア編) (後書き)

前回の話の「切れないものを切って、切れるものが切れない剣」の名前を募集しています。

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。

魔法の種類も募集しております。

こんな人物でほしいと言うのも募集しています。

第9話 食べ放題券争奪戦!?(決勝戦とその後のひと騒動)

「決勝戦 エルフリーデ対カイトの試合を始めます」

エルフリーデ

火：1・水：1・風：1・土：5

カイト

火：0・水：0・風：0・土：0

「お前、凄いな決勝まできたんだ」

「私の実力を思い知りましたか!」

『コソコソ』

「たまたま、実力者が偏って決勝まで行けたのにね」

「そうだね、能力の高い人は固まってからね」

「そこ!!聞こえてます!」

「な〜んだ、運が良かったんだな」

「何を」

床を何回も蹴っていた。

「カイト早く降参したほうが身のためですよ」

「ああそうだな。降参!!」

「…え………」

「審判さん早く〜降参しました」

「…あ、勝者エルフリーデ」

「よかったな、エーデ」

「な…なな……なんですのこれは!」

「そのまんまなんだけど降参て言われたから降参したんだが・・・!?」

「なんで、当然のことをしたみたいな顔をしているんですの?」
床を蹴った。

「もう、終わったのかつまらんのう」

「モ、モーガン様」

「もうちよつと楽しませてくれると思っておったのに」

「そりゃバアさんが、準優勝を食べ放題券にしたからだろ」

「フオフオフオ、まあよい授賞式でも、始めてくれ」

「は…はい分かりました」

美人のメガネをかけたお姉さんが言った。

「エーデあの人誰だっけ?」

「はあー!? 魔法学教えている。フローラ先生よ、毎回あつてるでしょ」

「たぶん!?!」

あんな先生いたかな〜??

「では、表彰式を始めます」

みんなが適当に集まって来た。

「それでは、準優勝カイト」

「いええー…いい!!」

叫んだ

『シーン』

「え…と反応なし!?!」

『シーン』

「はいわかりました。もういいです。シクシク」

「ごほっん、続いて優勝者エルフリーデ」

咳で片づけられた!!

「優勝者には、この勲章を」

なんか小さい変な勲章だった

「ありがとうございます」

「準優勝者にはこれを」

「ありがとうございます……何これ!？」

渡されたのは、1枚の変哲もない紙に『食べ放題券』と書かれてあっただけだった。

「おい、ババアこれはどういうことだ!」

「食べ放題券じゃよ」

「これのどこがだよ!」

「紙に食べ放題券とかかれてるじゃろ」

「詐欺か! いい根性してんな! このクソババア!」

「ふおおおおー何とでもいいうがよい」

「クソババア! やっぱり一回逝つとけ!」

「じゃかしいわい!」

「カイト! モーガン様に向かってババアとはなんですか! ババアとは!」

「あんたこそ二回もババアと叫んでいるじゃないか」

「いや…これは…ですね……」

フローラが慌てていた。

「フローラ気にすることのない。このバカにかまつてると本当に馬鹿が移るぞい」

「何だこのクソババア!」

「皆が、困っておるからこのへんでお開きじゃ。ほれ解散」

バアさんが奥に行ってしまった。それについて、フローラも……だからなし崩し的に授賞式は終わった……

「結局! どうなるのこれ!」

食べ放題券を上に掲げてみた。

「誰も反応してくれない……」

ヒューー

くデヴェテンテく

「カイトの準優勝とエーデちゃんの優勝を祝して乾杯!!」

「乾杯！」

「てか何でエーデがいるんだ」

「私が連れてきたんだよ」

「ジェシカまた余計なことを…」

「大人数の方が楽しいじゃないか」

「まあそうなんだが」

集まったメンバーは、フィオナ、ジェシカ、エーデ、フィーナの四人だった。

「でも、おばさんいいんですか？店を貸切にして」

「大丈夫、大丈夫こんな時ぐらいお祝いしないと！」

「わかりました。」

カラシカラシ

「今日は店じまいしているよ……ってどうしたんだみんな」
 たくさんの人が手に何かを持ってきていた。

「いやーめでたいことがあつたつて聞いたもんで駆け付けたのさ」

「チーズ屋のおじさんに、酒屋のおじさんそれに野菜屋さんに肉屋

「さんにみんな来たんだ！」

「フィオナ誰なんだ？」

「この店の仕入れ先の人達」

「なるほど」

次々と土産が来て、宴会となった。

酒くめ。食事持つて来い

なーんか似たことあったよな前に……

「いやな予感がする……………」

……………。

……………。

……………。

「ちょっとカイト聞いてよ」

「カイトさん私の話を聞いて」

「カイトこっち見て」

「カイトー今日の試合はみとめませーんですの」

真っ赤になって出来上がった4人が目の前にいちゃったりする。
周りの大人は、酔っていて楽しんでいた。

予感的中

「カイトさんこのブドウジュースおいしいですね」

「カイト…ブドウジュース飲む!？」

「お前ら酒臭いし…ああジュースじゃないから飲むなって」

「プハー…飲まなきゃやってられないでしょ」

「じじいみたいなこというなよジエシカ」

「君がやさしくしてくれないからでしょ」

近づいて来た。顔が火照っていてとっても可愛かった…

「こんなこと考えちゃだめだ」

「何考えてたの??? うんお姉さんにいつて見なさい」

さらに近づいて来て心臓が高鳴った。

「いや…近づかないで…」

突然

「何で…う…ううう」

口を手で押さえた。

「まさか!」

「やばい…もう…だめ………」
「ジェシカさん早くこっちです」

……………。

……。

「はぁー…疲れた」

何があったかは…思い出したくない………

「外の空気でも吸いに行くか」

『カランカラン』

外を出てみたら、フィーナがいた。

「おう、大丈夫か!？」

「カイトさんか…だいぶんよくなった」

フィーナが上を向いていたので見てみると

「きれいだな」

空に点で描かれたきれいな絵があった。

「点と点で結んで線となる。そしてそれが一つが絵となりお話ができる。凄いなと思わない?カイトさん」

「ああそうだな」

フィーナは、空を見上げていた。

今日の夜空は、俺たちを祝福しているように見えた……………

その後……

「うぁぁーエーデ落ち着け!!それにジェシカも何やってるんだ!

！フィオナは不思議なポーズするな！！フィーナはまた飲むな！！」

まだ・・・俺の夜は長かった・・・

「とほほ」

第9話 食べ放題券争奪戦!?(決勝戦とその後のひと騒動)(後書き)

前回の話の「切れないものを切って、切れるものが切れない剣」の名前を募集しています。

主人公の面白い武器を募集しています。武器と使用方法など書いてください。

魔法の種類も募集しております。

こんな人物でほしいと言うのも募集しています。

第10話 フローラ先生のお説教

〓学校・廊下〓

「ふわ~~~~寝み」

今日の鏡を見たときの姿はひどかった・・・

そりゃ昨日あんなだけ騒げば寝れなくもなる。

飲みつぶれた4人を介抱かいほうしていたんだから

「眠たそうですね」

授賞式で表彰していたフローラ先生が声をかけてきた

「おはようございます〓フローラ先生！」

「どうしたんですか!？」

「昨日祝勝会をしてそのまま、潰れてしまったんですよ」

「お酒とか飲んでないですよね!!」

「いや、俺は飲んでないです」

「それならいいです。そんなことより早くいかないと授業に遅れま
すよ」

「そうですね……」

どうでもいいけどね。

「呑気なこといわずにはやく」

「はい」

「言っておきますけど私より遅れたら遅刻ですよ!」

「え……」

「最初は、私の授業ですから」

「そう…なんですか!？」

「そうですね!!早くしなさい」

「はいはい」

先生より前を歩くことにした。

その時雰囲気が一変し、

「私の言っていることがわからないのかな!? カ・イ・ト」

「は、はい。了解!!」

「よろしい」

普通に戻ったのかな!?

駆け足で教室に入る

「それでは、授業を始めますね」

昨日と一緒に。

授業受けてないから普通を知らないんだけどね

「今日は、魔法の組み合わせの総復習をします。」

「やばい…眠い……」

「土と火を合…ると…鉄……った」

「お休み」

……。

……。

……。

「カイト起きなさい! カイト!」

「ふわぁ」

目がかすんだ

目の前には……

「うわぁ フローラ先生!!」

「やっと起きましたかカイト」

「は……はい」

「今まで見逃していましたが今日からそういきません」

「えーとなん……ですか??」

「昨日のモーガン様に対する態度が気に入りません」

「え……と……」

そういえば、昨日怒ってたよな!?

「罰を言うので昼に職員室まで来なさい」

「えー!」

理不尽な!!

そして、早くも昼休みに・・・

〈学校・教室（昼休み）〉

「頑張ってカイト」

「ああってフィオナは何でそんなに元気なんだ!？」

「昨日少し経ってから記憶がなくなっただけで起きたら朝だった」

「そりゃよかったな」

俺の苦勞も知らず・・・

「それより早くいかないと」

「おおそうだ」

〈学校・職員室〉

「こんにちは! フローラ先生見えますか」

「はい。こっちこっち」

「罰ってなんですか??」

「あなたがモーガン様をババア呼ぶのが気になって答えてください」

「いや! 推薦で呼び出したのに、手違いは起きるわいろいろと大変で」

「そんな言い訳聞きたいわけではありません!!」

「いや! 本当なんですけど……」

「わかりました。あなたは、いかにモーガン様が偉大なのかわかってないんですね!!」

「あの」

「わかりました。モーガン様は、魔力が高くて以前は全てがらだったんですから」

「あの! 勝手に話されても……」

「闇魔術の使い手で、近衛騎士団の騎士団長までしていた方なんですから」

「へ〜〜〜」

もう、諦める

「近衛騎士団というのはですね。聞いてますかカイト」

「はいはい聞いてます」

「王国で一番強いんですからね。その中でも騎士団長はトップなんですからね……………」

……………。

……………。

「昼休み終わっただけですけど……………」

「まだまだ逸話が残っているんです！」

「ああ〜〜〜〜もーっ」

「それですね、有名なのは姫誘拐事件です」

「げっそり……………」

「ちよつと！聞いているんですか？」

「ひっ！しません！」

その後も話が続く

……………。

……………。

……………。

「と言う事なんです。わかりましたか」

「うっつ…わかりました！」

もう授業が終わってしまった

「ああこんな時間それじゃあカイト君また明日」

「はい。また明日」

「学校・廊下」

「はあ~~~~」

「やあ、カイト！」

「おおジェシカ」

「どうしたんだい!？」

驚くジェシカの顔があった。まあ俺の顔はひどくなっていると思うが、

「フローラ先生にモーガンのババアのいい所を散々聞かされてた」

「なるほど〜お気の毒にフローラ先生はモーガン様をこよなく愛しているから」

「えっ!同性愛!？」

「いや、違うみたい。あくまで尊敬の対象でそれが行き過ぎたみたい」

「なんじゃそりゃ!？」

「学校内じゃあ有名だよ」

「そうなんだ~~~~!!」

新事実発覚!？

そんなフローラ先生の事を知れた一日だった。

第10話 フローラ先生のお説教（後書き）

これから、日常編が続きます。

第11話 食べ放題券の意外な使い道

「学校・レストラン（昼時）」

「よしっ、この食べ放題券を使ってみよう!」

昨日はフローラ先生の話でお昼食べさせてもらえなかったし…

「あの〜すみません」

「はい」

「この券使えますよ…ね?」

「これは……はい使えますよ、少し待ってください」

「えっ…注文…」

注文も聞かずに行っちゃった。

「何が来るのかな〜」

楽しみ〜

……。

「はい、パン二つお持ちしました」

「えっ…とパン二つ!？」

「モーガン様からこの券はパン二つまででいいとおっしゃっていました」

「なに!あのくそババア!」

「それでは、ごゆっくり〜」

小走りで行ってしまった。

「せっかく頑張っ…パン二つかよ…」

俺の努力は、何のやら…

「あら、カイトこんなところで何してますの?」

「エーデか…パンを食っているんだよ」

「あら、さみしいですね」

上から目線の口調をしてきた。

「仕方ないだろ金がないんだから」

「それはさみしいことですねー」

「何か恵んでくれよ〜」

「仕方がないですから恵んで差し上げましょう」

「本当か！？やった〜」

……。

「パンかよ…」

「あら、パンがお好きではなかったのですか」

「好き^{いそ}好んで食べているわけじゃない!!」

「そうでしたか？それはごめんなさい」

「それより、お金は大丈夫なんか？」

「私を誰だと思ってますのエルフリーデ・アーガイル。アーガイル家というのは名門貴族ですわ」

「ヘーアーガイルっていうんだ」

「知りませんでしたの!？」

「聞いてないしな」

「しかと覚えといてください」

「はいはい」

「カイトは何で貧乏なの？」

「貧乏はお金がないからだよ」

「そうじゃなくて、ここの学校はある程度の魔法がある程度の家名がないと入れないの」

「そうなのか!？だから、ここの辺の奴らは、ものの考え方がちがうのか」

「だから、何で貧乏で魔力がないカイトがここにいるのか不思議なのです」

「散々ないわれようだな…、しかしなんでだろうな？」

「その中でも、前の大会で準優勝できたのはすごいと思いますわ」
「そりゃどうも」

「けど…私との決着がついていませんわ」

「仕方ないだろ、食べ放題がかかってたんだから」

「食べ放題の結果がこれですか????」

「皮肉を言うんじゃない!」

「皮肉なんて言ってますんわ。事実を言っただけです。」

「それじゃあ、今日の夜ご飯おごってくださいよ」

「全然つながりありません」

「そんな〜名門貴族なんだろ!？」

「そうですけど……」

「なっ!頼むって」

「そんなに頼まれては、仕方ありません。放課後私のところに来なさい」

「お、おごってくれるのか!？」

「貴族に二言はありません」

「さすが、エーデ!好きになっちゃいそう!」

エーデの顔が赤くなる

「っ!……な、なにを言ってるんですの」

「おごってくれるからな」

「そんな…ことないですわ、それでは放課後…」

そそくさと去って行ってしまった。

〜ウルスラ庁前・レストラン〜

「ここは……」

ウルスラ庁前にあるレストランは、全て貴族向けで高い!
そんな中の一つに入って行く。

「ついてきなさい」

「は……い」

外観は、凄い。

それしか、言い表せない。うん。

「予約していた。エルフリーデ・アーガイルよ」

「これはお持ちしておりました。どうぞ中へ」

「行くわよカイト」

「わかった…」

中に入ってみるとシャンデリアがかかっていて、テーブルがとってもきれいな模様になっていた。

「どうぞ」

椅子を後ろに下げてくれるみたい

「どうも…」

「注文は何にしましょう？」

「これとこれとこれで」

メニューを指さして注文している姿が目に入る

「はい、かしこまりました。」

こちらは緊張しっぱなし。

「緊張する事なんてありませんわ」

「いや、普通は緊張するだろう？」

「鳴れてしまいましたわ」

「凄いな」

「こんなの凄くもなんともありませんわ。ただ親のお金を使っているだけなんですから」

「それでもだよ」

「そうですか」

会話が途切れ、時が止まり。

時間が進んでいく

「お待てせしました」

食事を持ってきたことで時間が進んだ。

目の前に出されたのは、俺が食べたことのないものばかりだ。

「おおー！おいしそう」

よだれが垂れてきてしまった

「それでは食べましょう」

「はい！パクパク、モグモグ。うまいな〜これ！」

「そんなに焦って食べなくても…」

「いや、だってここまでの物たべたことないぞ」

「喜んでくれるなら連れてきたかいがありましたわ」

「ああ、感謝してるぜ」

ものの数十分で食べきり

「うまかった〜」

「本当によく食べましたわね」

「エーデ、ありがとうな」

「そんなこの程度たいしたことないですわ」

エーデが少し喜んでいいる顔をする。

「エーデの評価を改めないとな」

「お金は、自分で稼いだものではないから自慢できませんわ」

少し怒ったような悲しそうな顔をしているエーデ。

そんな顔を見て何も言う事が出来なかった。

「そう…か」

「そうですね、親から地位や金をもらって威張っている貴族は、夕ダのくずですわ」

「そこまでいうかよ…まあ落ち着けて」

少し時間がたち、顔色が戻ってきた。

「すいません。取り乱してしまいました」

「気にするなっ」

お金とか地位を気にしているようだ

「私の兄がそうだったんです」

「えっ…お兄さんが!？」

「いえ…やっぱり何でもないです」

「そうか」

エーデの顔を見てこれ以上聞く事が出来なかった。

「それでは」

その後走^{あと}って行った。

その後姿^{うし}が寂しそうに見えたのは気のせいだろうか・・・

次の日にエーデに会った時は、何事もなかったような顔をしていた。

第12話 テヴェテンテの休日

「休日」

今日は、お金がないため休日返上で働くことにした。

「よつし、いつちようやるか」

朝市にテヴェテンテに訪れた。

「テヴェテンテ」

「こんにちは」

「おや、カイトかいどうしたんだい!？」

まだ、開店もしていない時に現れた俺をみて驚いた顔をしている。

「お金がないもんですから、働かせてください」

「なるほどそういう事だったんだ。わかった」

納得がいったようで快く承知してくれた。

「それで…何すればいいんですか？」

いつも、夜に行っているため主な仕事は掃除に注文、会計といった程度の仕事だ。

「そうだね、それじゃあ、フィオナと一緒に買い出しに行ってくれないか？」

「いいですよ」

買い出しぐらいなら大丈夫かとタ力をくくっていた。

「フィオナ……! 買い出し頼んだよ」

おばさんが大きな声で呼んだ為、奥からフィオナが出てくる。

「了解、お母さん……って何でカイトがいるの?」

こちらに気付いた時、何でいるのか不思議そうな顔をしている。

そりゃ、休日は休むって宣言してたんだから・・・

「お金がなくて…」

その一言で全てを悟ったような顔をする。

「なるほど」

「そういうことで、2人ともよろしく！今日は業者に頼んで運んでもらわなくていいから節約になるし」

「そうだね！」

2人の笑みは、ドラゴンでも殺せそうなぐらい冷たかった・・・俺は、荷台を持っていくことになった。

「こんなものあつたんだな」

「何かと便利だと思う」

「テヴェテンテ前」

「それじゃあ、カイト行こうか？」

「どこからだ？」

「まずは、軽めなチーズ屋からにしようかな」

「了解！」

この時は、フィオナの言葉を理解できていなかった。

「チーズ屋」

「おじさん、いつものください」

「わかった」

チーズ屋のおじさんは、フィオナを見ただけですぐに準備に取り掛かった。

手際が良く、ものの数分で終わった。

「はいよ…カイトじゃないか！！」

前に祝勝会であつたのを覚えてくれてたらしい

「どうも」

「何だ。こんな朝早くから働いているのか」

「はい、お金がなくなつて」

「かぁーーーー。そんなことに青春をささげてちゃあもつたいない！あつ、でもフィオナちゃんがいるか！！」

「っ！？……ちよつとおじさん」

何やら顔を赤くしてあたふたしているフィオナが必死におじさんを

説得しようとしている。

「おじさん、これはお母さんに頼まれて。私は関係ない」

「はいはい、そういうことにしといてあげるよ！フィオナちゃん」
「うつつ」

顔を隠してしまう

「ほら、フィオナ次行くぞ」

「もうカイトの馬鹿……ぶつぶつ」

なにやら小言でつぶやいているようだった。

「ほら、いくぞ！」

「もう、わかった。次は野菜屋」

すねたような顔をしていつてしまう。

「おい、ちよつと」

慌てて追いかけた。

〈野菜屋〉

「おばさん、こんにちは」

「こんにちは、フィオナちゃんかい。ちよつと待っててね」

フィオナが紙を渡したら、テキパキと野菜を集めて

「はい、どうぞ」

「ありがとう。さあ次、酒屋」

「はいはい」

荷台にどんどん荷物が乗せられていく

〈酒屋〉

「おじさん、このお酒多めにください」

紙を渡して指をさしている

「はいよ」

「ありがとう」

そしてすぐに持ってきて荷台に乗せる

「次、肉屋」

「りよう…かい…重い…」

荷台の重さがどんどん増していく

「肉屋」

「いつものください」

「フィオナちゃんかい、わかった」

手慣れた様子で切って入れる

「はいよ」

「ありがとう」

たくさんの袋をもらって荷台に入れていく

「カイト次は魚屋」

「まだ…あるのかよ…」

荷台が折れそうぐらい重いんですけど…

「魚屋」

「ありがとう」

フィオナが魚屋のおっさんにお礼を言っていた。

相変わらず、フィオナの顔を見ただけで手早く準備している。

「はい、これで終わりだよ。カイト」

「やつとか、でもこれを持っていくのは骨が折れそうだな」

後ろには、いっただいどうやって積み重ねたのかわからないぐらいたくさんの物が載っている。

これを持って帰るのは結構つらい

「いつも、フィオナが持っているのか?？」

「違う。いつもお金を払って運んで貰っているの」

「なるほど…ていうか何で今回は違うんだ!？」

「だって、カイトがいるし…お金の節約になるから」

最後の部分は、ボソツと言った。

「まあ、テヴェテンテの役に立っていればそれでいいのだけだな」

「早く帰ろうか」
「了解」

今回の買い出しで、フィオナの休日が見れたからまあいいかな
それに、フィオナが周りの人から好かれている事もわかったし・・・

「カイト速くして!」

「おいおい、ちよつと待ってくれよ……おもい……」

朝日が昇りつきた空の下で荷台をせつせと運んでいた俺だった・・・

休日のテヴェテンテは始まったばかりだ。

「お昼」

「へえ、結構賑わっているな」

夜と比べると少ないが、ただの定食屋になっている昼間に客が入っているのは意外だ。

「カイト、会計お願い」

「了解」

フィオナも忙しそうにちよこちよこと走っている。

結局自分たちがお昼ご飯を食べたのがおやつ時間のちよつと前だった。

「カイト早く食べて」

「ああわかった」

フィオナがせかしてくる。

この後は、すぐに3時の時間でカフェとなるらしい

「この店凄いな」

昼は、定食屋。おやつは、カフェ。夜は、酒屋。

「いまさらだよ」

当然なような顔をしているフィオナだったがどことなく嬉しそうだった。

「がらつがらだな…」

3時を過ぎて、もう少しで夕日が見える。

「たまたま……だよ…」

「本当か？」

未だに席が一つか二つぐらいしか埋まっていない。
しかも、酒を頼んでいる客もいる。

「正直言つとこの時間帯が一番少ない」

「やっぱり…」

「どうしようか考えてはいるんだけど…なかなか思い浮かばない」
「頑張れ！」

励ましの言葉が思い浮かばずに困る・・・

そこから、夜になると俺も知っているテヴェテンテンなる。

「カイトいつも通りだから」

「よしてきた」

そうしてあつという間に時間が過ぎて行つた。

今日は、テヴェテンテンの休日がわかった。

その後筋肉痛になったのはいうまでもない

休日働くのはほんとについてね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015x/>

Making Magic Seed

2011年10月23日19時32分発行